

Ⅳ 高等部の実践

挑戦学習への取り組み

1. 研究の概要

(1) 生徒の実態と挑戦学習のあゆみ

高等部には現在30名（男子16 女子14）の生徒が在籍している。容貌・性格が一人一人違うように 身体的能力や社会性・知的な面でも千差万別であり 個性豊かな生徒たちの集団である。ところで彼らの家庭生活の様子 学校での休み時間の過ごし方はどうであろうか。目的をもって 精気あふれた行動をする生徒もいるが ただ漫然と過ごしている生徒もいるというのが実情である。こうしたことから 何か宿題を出してほしいという親の要望が出てくるのもうなずけるところである。それでは彼らには何も興味・関心がないのかということ決してそうではないようである。身の回りの事物や事象に対しては興味・関心があって 何かをしたい 知りたいといった気持ちはその子なりに十分もっている。それが何であるのかは周りの大人はもちろん 本人も気づいていない あるいは分かっていない場合が多いようである。自分は何ができるのか 何が心から好きなのかを気づかせること そして同時にそのことに対して主体的 積極的に取り組む態度を育てることが挑戦学習を考えだすきっかけともなったのである。

挑戦学習は普段子どもたちからMTと呼ばれている。このMTは本来マルチパーパスタイム (Multi purpose Time) の略であり 多目的に利用できるゆとりの時間を意味しているが 昭和56年度からこの学習が取り組まれ 生徒の動きが予想以上に意欲的なことからいつとはなしにこの学習の代名詞となったわけである。

出発点は既に述べたとおり 宿題をたくさん出してほしいという親の要望に端を発したものである。それまでも生徒に応じた宿題を出してはいたのであるが 多少 マンネリ化していたこともあった。そこで 漢字の読み書き 計算のドリルなどで級や段の認定証を作って意欲的なものにならないかなどと話し合った。しかし 生徒の日常の様子を見たり 将来のことを考えたりすると 単に机上の学習に限らなくてもよいのではないかと課題とすべきことがいろいろあるのではないかとということになった。そして教師がそれぞれ考えた課題を出し 生徒がその中から選ぶという形がおもしろいのではないかと その練習が宿題にかわるものになればよいなどと考え とりあえずやってみることになったわけである。その結果 生徒たちは非常に意欲的に取り組み 教師側も手ごたえを感じたのであった。

この学習を促したもう一つの背景がある。本校では昭和53年以来 集団学習が研究のテーマとなり すべての教師すべての子どもが総ぐるみで活動に参加する集団指導の形態をとる中で個に合わせた指導を行ってきている。この学習も総ぐるみの指導体制を生かし

ながら 一人一人に合わせた指導ができるという点で取り組みやすかったと言える。

ところで 最初のころは“挑戦”の名の通り何か難しいこと 苦手なこと うまくできないことに敢えてチャレンジするといった受けとめ方をしていたが 現在はそれ以上に好きなこと 得意なことを今以上のレベルでチャレンジするといったことも大切だと考えている。その結果が余暇利用を含めて自分で自分の生活をつくっていくことにつながると考える。

課題は 生徒がそれぞれ一つずつ選ぶ「選択課題」の他に みんなが同じものをそれぞれに応じて行う「共通課題」(なわとび 百人一首の暗誦)も考えられた。いずれの場合も普段の学習からは想像もつかぬ成果を見せてくれることもしばしばであった。なわとびでは過去に前まわしを連続千回以上も跳ぶ生徒が出たし 百人一首では百首とも暗誦した生徒が3人も出ている。

話し合い 改善しながら続けた学習であるが 年間を通して行われる中で発表に時間にとられることなどから 夏休み(選択課題)と冬休み(共通課題の百人一首)の課題だけがこの指導形態で行われる時期が最近まで続いていた。しかしながら学校週5日制が定着しつつある昨今 改めて自由な時間が多くなること その間に目的を持った意欲的な生活ができるようにと考える再度この学習に重きをおいていくことにしたわけである。

(2) 挑戦学習の意義 特徴

これまでの話し合い 実践の中から もう一度この学習のねらうもの 大切にすべきことについて述べてみたい。

- イ. この学習は 教師が「こうしたものができたらいい」あるいは「上手になればいい」と思って提示した課題の中から 生徒が「してみたい」「おもしろそう」と思った課題を選択するというので 教師が教えることを選べ 生徒が学ぶことを選べるというのが大きな特徴である。これはこれまでに障害児教育ではあまり例をみない新しいスタイルの学習である。
- ロ. 教師も生徒も共に緊張感をもって学習に臨むことになる。教師は課題を提示して生徒から選ばれるということで その生徒の練習から発表に至るまでの様子や心の動きを大切にしてお応じすることになる。そしてその間最大限生徒のもっているものを引き出し 合格できるように腐心する。一方生徒の方も時間を見つけて練習し みんなの前で発表することになる。発表の際の緊張感は相当なもので その分合格した時の喜びの表情やアクションは何とも言えず これがまた新たな意欲をかきたてることになる。この褒められ 成就感をもった体験や自信は必ずや子どもが育つ原動力になると確信している。
- ハ. 教師から練習方法を教わり 次第に学び方を学ぶということもこの学習の特徴と言える。それが学校に限らずどこでもできる課題であるならば 親 兄弟が指導者ともなれる。その意味で子どもの具体的な課題をもとに学校と家庭が一緒になった学習が期

待できるのもこの学習の良さではないかと思っている。そして結果を共に喜び またそれを通して得るものが多々あるものと思う。もちろん 一人で課題に取り組める生徒にとっては自由な時間を有意義に活用でき 将来の自分の生活を切り開くことにつながるものと期待している。

ニ. 教師はともすると生徒のことをよく知っており その力量も分かっているつもりである。しかし度々経験することであるが 生徒たちの思わぬ力 予想さえしなかった力を見せられ 喜ぶと共にそれまでの指導のいたらなさ 勝手な思い込みや決めつけを反省させられる。

ホ. この学習は発表する人 それを見る人 評価する人がいて 初めて成り立つものである。発表を見る人にも勉強となり 時には刺激を受けて新たに挑戦する姿も見られる。発表者も見る者もそれぞれがマイペースで自分を高めていくものと言える。そして発表者の必死の表情 姿勢は 合格を願い応援する人との間に共に喜び共に悲しむ良い関係を形作っている。障害の重い生徒の発表の場合 その内容 出来栄えについては目をみはるものは少ないが 一生懸命頑張る姿あるいは普段の力を安定した形で見せてくれる所に共に生活している良いかかわりを見いだすことができるし そのことを大事にしていきたい。

以上 挑戦学習の意義 特徴について述べた。能力差が一層大きくなる高等部段階においてもみんなと一緒に中で一人一人に応じた対応が十分できるという意味で この学習を大切にしていきたいと考えている。 (浦田東作)

(3) 挑戦学習の方法

挑戦学習の方法については当初取り組まれた方法を基本的に受け継ぎ 今日に到っている。『研究紀要』(1981)にその方法について詳述されているので ここではこれまでの中で改められてきている点も含めて今日の到達点のうえにたって述べていくことにしたい。

方法を述べるにあたっては全体の進め方を明確にすることが必要となろう。大まかな進め方を図式的に示すならば次の通りである。

学習課題の提示 → 課題への挑戦 (課題の選択 → 練習 → 発表) → 審査 (評価)

以下 この順序にしたがって説明を加えていくことにしたい。

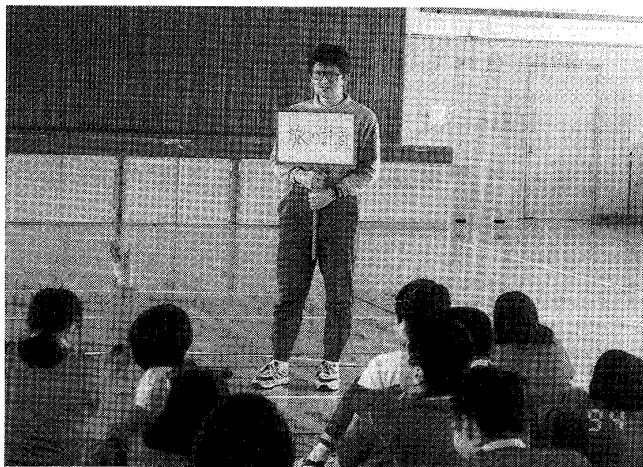
① 学習課題の提示

学習課題の提示は高等部の教師全員が行う。全生徒が並んでいる前で学習課題名を記入したプラカードを持ち 順次その内容の説明及びアピールを3分程度で行う。時間がオーバーした場合は合図のベルを鳴らすようにしている。ベルは話の区切りを明確にするとともに 音の響きを喜ぶ生徒もいて 課題提示の際には“必需品”となっている。

提示の順番は毎回同じというわけではなく その都度工夫をこらしている。例えば「先

生の名前のあいうえお順」とか「先生の家が学校から近い順」といった具合である。このような問いかけには積極的な反応がみられ、その後の課題についての話も集中して聞いているようである。

ところで、課題そのものについてであるが、これは生徒の実態にあわせることはもちろん提示する側の得手とするところから決められる場合が多い。ただ、課題が重複したり傾向が片寄ったりすることがあるので事前にジャンル別に調整を行っている。それは①知識に関するもの、②手先（手指）に関するもの、③運動に関するものの3つであり、生徒の前で提示する際にもそれぞれのジャンル毎に色分けしてプラカードに表記している。



「こんどは旅の計画にしようかな。」

② 課題の選択

課題の提示が終わると生徒の選択になる。これは挑戦の第一歩であり、それだけに生徒の表情は真剣そのものである。2～3分考える時間を与えた後は合図とともにそれぞれの教師が持っているプラカードのもとに駆け寄ることになる。ほとんどの生徒はあらかじめ自分で決めたプラカードのもとに行けるが、決めかねて後ろの方で立ったままの生徒も若干見られる。この場合は教師が援助を行い本人の納得のうえで決めることにしている。

ただ、ここでの問題点は人数の片寄りである。そこで極端な片寄りが見られ、指導が困難と予想される場合にはやはり本人の納得のうえで他の課題を選択させている。

課題の選択は通常1つであるが、夏季休業を前にした7月には夏休みの宿題という意味もあり、希望者には2つの課題を選択させている。その場合、手先（手指）に関するもの、運動に関するものを初めに全員が選択し、その後知識に関するものを希望者が選択するという方法をとっている。

以上は「選択課題」方式の場合であるが、この他に「共通課題」方式についても取り組んでいるので付言しておきたい。「共通課題」方式は生徒全員が同じ課題にそれぞれの目標を決めて取り組む方式である。これまでに“なわとび”に取り組んだこともあるが近年は“百人一首”に取り組んでいる。この場合は「○首覚える。」ということの“選択”で生徒自らの目標を尊重したうえで学級担任が直接指導にあたっている。

③ 練習

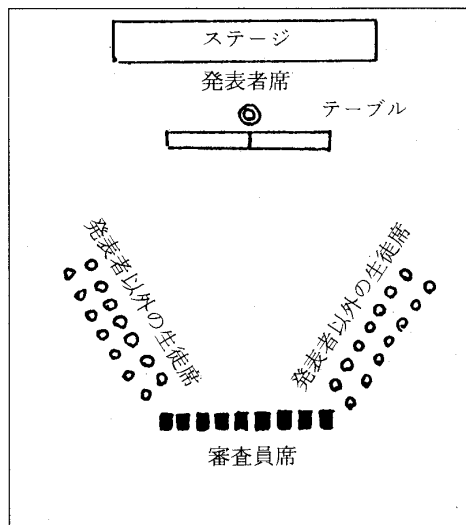
それぞれの学習課題が決まったら、ただちに練習の時間を設定している。教師の側からすると挑戦した生徒が誰で、その課題に対してどれだけの力を現在持っているか、そして発表にむけてどれだけの目標にするのが良いかを把握することになる。一方生徒にとって

みると具体的な内容と目標が分かるとともに 練習方法についても指導をうける場となっている。ここで指導をうけた後 生徒個々の練習が行われる。練習時間は休み時間 放課後 そして家庭に帰ってからのということになるが 長期の休み前に提示された学習課題に挑戦する場合は家庭での練習にウェイトがおかれることになる。

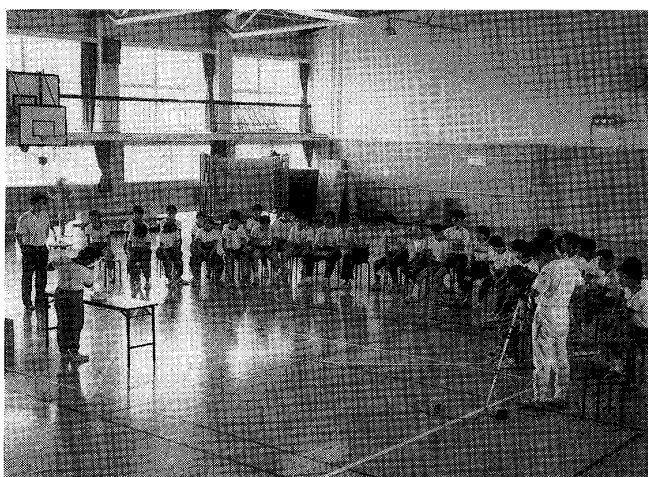
④ 発表

生徒の練習も深まりをみせ 自信をつけてきたところで発表を迎えることになる。発表の会場は可能な限り体育館を使用している。会場の配置についても「発表の場」という雰囲気を盛り上げるための工夫をしている。

まずは審査員と発表者以外の生徒の席である。これまでは発表者のすぐ前に見学する生徒が学級毎に並び その横一列に審査員が並んでいたのが 図Ⅳ-1のような配置を試みてみた。これは全員に発表の様子がよ



図Ⅳ-1 体育館での配置図



呼吸をととのえて……

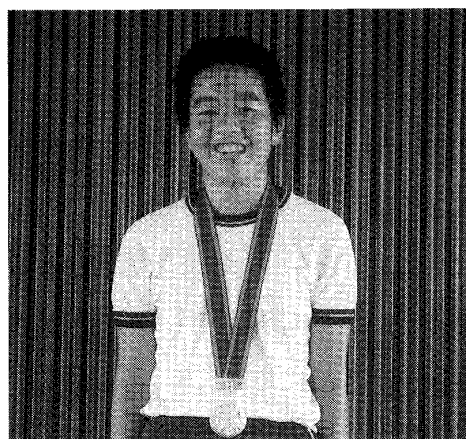
く分かるように とりわけ審査員はよく見える位置について適正に審査できるようにという配慮からである。

また審査員が判定をする場合 ○印をつけた板(合格プラカード)を提示することにした。昨年度までは挙手で意思表示を行っていたのであるが このようなプラカードを掲げることにより一層それが分かりやすくなるとともに 生徒の側からの見えやすさを考慮して取り入れたものである。

⑤ 評価

発表を終えると審査員からの質問をうけつけ 審査を求めることになる。審査員は教師とMT委員の生徒で構成されている。MT委員は各学級から1~2名ずつ選出され 挑戦学習の準備や号令かけの外 この審査を主な任務としている。なお通常審査員は9名でそのうち2名程度がMT委員である。

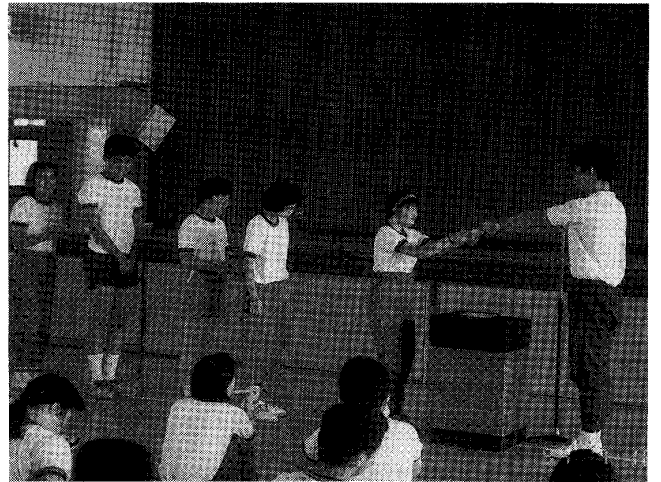
審査員の過半数の合格プラカードが挙がると合格となるが それで審査が終わりというのではなく 合格プラカードが挙がらなかった審査員からのコメントを聞き



「どうです。似あうでしょ。」

今後の励みとしている。残念ながら過半数に達しなかった場合は再挑戦ということになり後日発表を行い審査を受けることになる。厳しい審査員の眼が光っていることから全員の合格プラカードが挙がるということはきわめて稀であるが 頑張りが評価されて全員のものが挙がることもある。この場合は特に“パーフェクト合格”とし 今年度からは担当者が金メダルをその場で掛けることにした。

このように合格の形は大きく3つに分けられるが 合格者全員には認定証を渡すことにした。交付式は一通り合格者が決まった後の高等部朝の会の場で行い それぞれの課題提示者が渡すことにしている。また「挑戦学習合格一覧表」を作成し 一年間の取り組みの様子が分かるようにしている。この一覧表にはそれぞれの学習課題ごとに パーフェクト合格・合格・再挑戦合格が分かるように色別のシールを貼っている。(資料参照)



「がんばりましたね。」

(4) テーマとの関連で

高等部を学校教育全体の位置付けでみるならば学校教育の仕上げの三年間であり 近い将来には実社会に巣立っていく準備の時期にあると言える。それだけに刻々と動く社会の状況の中でも自分らしさを出し 充実した生活を送ることができるための力を生徒一人一人につけさせる教育が求められることになる。充実した生活ということで見ると“余暇生活”も当然のことながらその中に含まれ その在り方が学校週5日制あるいは卒業後の週休2日制という今日においてとりわけ大きな意味合いをもってきていると言える。

本校で独自に考え出した学習の形態である挑戦学習は 今では生徒の中にすっかり定着し 高等部教育の重要な一環をなしている。この学習に取り組んだ当初からすでに余暇に着目し「今まで漫然と過ごしていた余暇の時間を有意義に活用できる」ことに触れている。もちろん この学習は単に余暇の活用だけにとどまらず i) 生徒自らが自主的に取り組める ii) 生徒自身も知らなかった能力を発見した喜びが得られる iii) 緊張感のある学習活動になり また努力のあとの評価で認められ ほめられる喜びを味わう iv) 自分自身を高める学習となる v) 身近な人が指導者となれる学習である vi) 知的学習の糸口になる といったことなどをもちあわせているとしている。これらの諸点は今日の取り組みにおいても概ね当てはまるものと言えるが 現在の到達点のうえにたってさらに検討を加えることにした。

すでに見てきた通り この挑戦学習は生徒自らが学習課題を選択し 練習に取り組んだうえで発表を行い 審査(評価)を受けるというものである。学習課題に挑戦し 評価を

うけていく中で課題をやりとげた自分を見直し 誇りに思える体験が直接的に得られる場になっていることがこの学習の大きな特徴とも言える。もちろん そこには頑張りを正當に評価してくれる集団があることから喜びも大きいものとなるし さらに次の課題への挑戦意欲も高まることになる。このような積み重ねによって獲得した力が生活の中に生かされるとともに生き方も希望をもった前向きなものになるであろう。

改めて述べるまでもなく 挑戦学習によってのみこのような力がつくというわけではなく 学校教育全体 取り巻く生活環境全体の中から育つものと言えるが 目当てをもって物事に取り組み 評価を受けるという学習のスタイルは生き方のうえで一つの契機をなすものと確信している。挑戦学習について述べてきた点を要約して示すならば次のことが言えるであろう。

- ①学習課題をやりとげ まわりからの応援や正當な評価を受けることで 自分に自信をもつことができ 前向きの生き方につながる。
- ②取り組んだ学習課題そのものが余暇を含めて生活に生かせる。
- ③目当てをもって取り組む態度と力が育つ。

以上のように挑戦学習をとらえ直し 今年度のテーマである“豊かな心と生活をめざして”と結びつけて実践を試みることにした。 (安田茂章)

2. 実践例

(1) 皮むき

① 課題を選んだ理由

“現代っ子は刃物を使うことが下手だ”とよく言われているが その実態は本校の子どもたちにおいても全く同じであり 危険性を伴うこともあっていっそう経験不足を感じている。

本校では高等部になると調理実習などを通して包丁を使う機会は何度かあるが 子どもたちにとっては単に経験しただけに過ぎず 一人一人が上手に使えるようになるまでの学習はなされていない。全体的には“包丁を使う作業は怖くて見てもらえない”というのが生徒たちの実態である。

しかし 今回はあえてこの難しい課題を選んでみることにした。包丁を上手に使うことができれば家庭でも食事の手伝いなどができ 将来にも役立つと考えられるし またこれまであまり経験したことの無い者はこの機会にじっくり取り組んでみるのも良いのではないかと考えたからである。

② 課題提示及び選択の時の様子

提示では野菜(じゃがいも にんじん)や果物(りんご)の皮むきを生徒の前でして見せた。「みんな包丁使えるかな。」の問いに「あんまりできない。」「家で手伝いしてる。」などの答えがかえってきた。生徒の能力差も考慮し 包丁だけを使うのではなく皮むき器を使っての挑戦も良いことにした。しかし指導者としては 最終的には包丁を使って発表させたいと考えていた。

選択時の生徒の様子だが 3名(男1 女2)はすぐに皮むきの課題を選んだが もう1名の女子はあれこれ悩み 最後にこの課題を選んだ。最終的には4名(男1 女3)の生徒が皮むきの課題を選ぶことになった。この課題を選択させるにあたっては 教師側からの働きかけは全く行わず 生徒が自主的に選択することができた。

③ 練習の様子

一回目の練習を行った。まず皮むきの課題を選択した4名の実態について調べてみた。女子生徒3名はこの課題が適切であると考えられたが 男子の生徒は皮むきがすでに上手であったので他の課題を選択した方が良いと考え 生徒の意向も取り入れ別の課題に挑戦することにした。練習内容については 各自の実態に応じて a. 包丁を使ってじゃがいもの皮むきをする b. 皮むき器を使ってにんじんとじゃがいもの皮むきをすることに決め それぞれがどちらかの方法で発表することにした。練習の様子をみていると 皮をむくというよりも野菜や果物をまな板の上に乗せ 包丁で皮を削っているという表現がふさわしく 指導者としては今後どうなることかと少々心配になった。

数日後に行われた二回目の練習になると少しずつではあるが上達が見られ じゃがいも

やりんごなどを左手に持ち 何とか皮をむくことができるようになった。そこで包丁で皮むきをする時の指の使い方や皮はできるだけ薄く切れ切れにならないように長くむくことなどの細かい部分の指導を行い 家で毎日練習することを約束した。この段階で学校を欠席しがちな女子生徒1名以外はaの方法で発表することを決定した。

日々の練習は 休み時間などを利用して一人一人の取り組みの様子を指導者がしっかり把握し 生徒がどこでつまづいているのかを知り 励ましたり 称賛したりしながら合格をめざして練習を進め 家庭での協力もお願いした。

④ 発表の様子

発表当日3名は「包丁を使ってじゃがいもとりんごの皮むきをする」という課題 1名は「皮むき器を使ってにんじんとじゃがいもの皮むきをする」という課題で行った。包丁組はいつもよりやや緊張した様子ではあったが 与えられた課題に一生懸命取り組んでいた。「皮が厚くむけてしまった者」「皮が切れ切れになってしまった者」「むくののに時間がかかった者」「みんながびっくりするほど上手にむけた者」など一人一人の実力がよく表れていた発表であったと思われる。一回目の練習を見る限りでは包丁を使ってこのような発表ができるとは考えられなかったが 本人の努力とまわりの協力により 全員が無事合格できたことは何よりの成果と言える。この中の男子生徒は審査員9名全員の手が挙がりパーフェクト賞を受賞した。これは見ている女子生徒にやる気を起こさせたのではないだろうか。

発表中皮をむくののに時間がかかり 見ている生徒たちが退屈しないだろうか心配もしたが 発表者を応援するかのように最後まで真剣な態度であったことが嬉しかった。普段はなかなか集中できない生徒もこの時間になると発表者をしっかり見ようとする様子が見え 発表者と見る者が一体となってこの学習を進められることが何よりの良さと言える。

⑤ まとめ

刃物を使うというやや難しい課題ではあったが この機会に生徒にも新しい経験をさせることができ 取り上げてみて良かったと感じた。パーフェクト賞をもらった男子生徒は発表後も家庭で皮むきをずっと続けており 今では実践に役立つ実力が十分に身についたと考えられる。またこの学習では皮むきに挑戦しなかったが“私も挑戦したい”という女子生徒もおり 夏休み中に家庭で取り組んでいた。このようにして友達の発表をみることで自分も挑戦してみたいという意欲にもつながっているようである。

これからも生徒たちが意欲を持ってこの学習に取り組んでいけるためには 生徒たちが挑戦してみたいくなるような課題 教師側が是非挑戦させたい課題など提示する課題の内容について十分検討していかなければならないと考える。 (谷内厚子)

(2) 水うつし

① 課題設定にあたって

日常生活において容器から容器へ液体を移す場面はしばしば見受けられるものの一つである。そういう意味でこの「水うつし」の課題は日常生活面において役立つものと言えなくもないが、この課題はそれを主なねらいとして設定したものではない。

生徒自ら課題を選び、発表するというこの挑戦学習のシステムを最大限に生かし、子どもたちの心身の発達と成長を促す為の一助とする事を第一に考えた。またもっと手軽に取り組ませることで、この挑戦学習に親しんでもらいたいとも考え、生徒たちの興味・関心を引くことは勿論、単純で分かりやすい課題を取り上げようとした。

ジュースをコップに入れる場合、注ぎ口への注意力、傾けながら容器を保持する力と水の出方を調節する技量、全体をコントロールする集中力などの要素が考えられる。そして何よりも外へこぼさないようにとの緊張感を伴う作業であると言える。

② 課題提示及び選択の時の様子

生徒たちはこれから何が提示されるのかを固唾を飲んで見守っている。いわば好奇心とも言える生徒たちの興味・関心を引き出し、どのようにしたらより多くの生徒をこの課題に集めることができるのか。これはまず教師の直面する工夫のしどころでもある。

今回の提示では最初何も言わずに瓶を2本取り出し、片方からもう片方へ水を注いでみせた。どのような課題であるかは一目瞭然と言える。その結果男女2名ずつの4名の生徒が挑戦してきた。言わば常連のような男子生徒もいたが、ほとんどの生徒は得意というより面白そうな課題であるということで挑戦してきたものと思われた。またふだん自分の意思をなかなか表に現すことをせず、常に教師の指示を待っていることの多いもう一人の男子生徒が誰に誘われたわけでもなく、自ら進んで側に寄ってきたのには少し意外であったがうれしくもあった。

③ 練習時の様子

選択終了後に早速第一回目の練習を行った。説明の間にも4名の生徒の早くやってみたいという気持ちが伝わってくる。方法としては同じ形の容器を2本用意し、片方の容器の一杯の水をもう片方の空の容器へ洩らさないように全部を注ぎ込むというものである。どの生徒もこれまでこのような経験は無かったことと思われた。

用意した容器はビール瓶と1.5ℓのペットボトルと一升瓶である。主にこの3種類の容器を使って順に練習することとして、最初は水の量や保持する力も少なくてすむビール瓶から始めた。男子生徒の一人はこの最初の練習でビール瓶のコントロールができず、途中から注ぎ口がずれてこぼれだしたのを見ても止めないで、容器を持ったまま笑い出してしまいたくさんの水をこぼしてしまった。

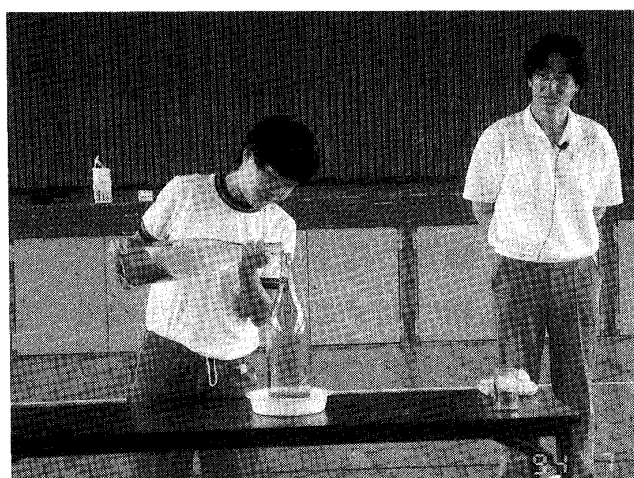
その後、日を改めてペットボトル、そして一升瓶の順に計5回の練習を行った。練習は

主に学校で担当教師と共に行い 段階を追って一人一人の上達度をチェックした。しかしさすがに一升瓶は重く 水の量も多いのでコントロールが難しく 生徒たちのこぼす量が多くなった。途中一休みする子や瓶を持ち替える子もあり また慎重な子では注ぎ終えるまでに約3分間もかかってしまった。発表は一升瓶で行うつもりであったが 練習での一人一人の様子をみて考慮することとした。

④ 発表時の様子

課題を選択して挑戦し 目標を定め それに到達するための練習を経ていよいよ発表を迎える。発表場面はこの挑戦学習のいわばハイライトとも言える。

発表時の緊張感は挑戦する生徒もそれを担当する教師も相当なものである。女子生徒の一人は途中何度も溜め息をつきながらの発表であった。いかに発表時の緊張感が大きいかうかがわれる。もう一人の女子生徒は練習時にはお喋りやよそ見 それについ笑ってしまったりといつも大量に水をこぼしていたにもかかわらず 発表では喋らず 笑わず よそ見せずと今までで一番真剣な表情で僅かな水をこぼしただけであった。まさに息を止めて行うという表現そのものの発表光景であった。



水うつし

全員一升瓶で発表を行い 結果は4人全員合格となり そのうちの1年男子と3年男子は見事パーフェクト合格となった。

⑤ まとめ

課題に取り組み皆の前で発表することで生徒はより大きな緊張感を体験する。それを乗り越え安堵感とともに認められる喜びを味わう。この喜びが自信となって新たな意欲を生んでいく。

今回の課題は発表の場を中心にして考えた課題とも言える。ほんの数分間にしかすぎない時間であるが その生徒の持つ全神経が集中される。課題に挑戦する生徒とそれを見守る生徒たちが気持ちを一つに集中させることにより その場に緊張感と共に一体感が生まれる。無事発表を終えた生徒と固唾を呑んで発表を見守っていた生徒の間にホッとした空気が流れる。

子どもたちはその体の中に沢山の可能性を秘めている。成長するにつれていろいろな事を経験し その中でできなかったことができるようになっていく。これからもこの挑戦学習をきっかけとして 生徒自身が持っているものや新しい発見を形にして引き出すことができれば幸いである。挑戦学習は一人の生徒の自己表現の場であるともいえる。

(橋本直紀)

(3) 独楽(こま)

① 独楽を選んだ理由

第2回目の挑戦学習は6月に計画されていた。梅雨のため室内で過ごす時間が多くなる時期である。また2・3年生の生徒は現場実習と重なり 教師が学校で直接 継続的に指導できない時期でもあった。

独楽は読んで字の如く 一人で楽しみながら練習できる課題であり ひもをきちんと巻く手先の器用さ スナップを効かせて投げる巧緻性を養うことができる。また回る回らないで成功 失敗を生徒自身がはっきりと認識できる課題であると考えた。しかし実際のところ本当に生徒が回せるようになるか不安で 合格基準の見当も立っていなかった。

② 課題提示及び選択の時の様子

高等部の生徒全体の能力差を考慮して 指で回す・ひも巻き独楽・すくいとり^{注1}の3つをして見せた。勢いよく回転する独楽を注視する者 手に乗せ回す技に拍手する者などそれぞれであった。そして5人の生徒が自分から独楽を選択してきた。選択の理由として「面白そうだ。」が4人 「手が器用ではないので練習したい。」が1人であった。

③ 練習の様子

5人とも指で回すことができたので 全員がひも巻き独楽に挑戦することにした。まずはひもの巻き方と スナップを効かせて投げる感覚をつかむ練習をした。ひもをしっかりねじれないように巻くことは 予想以上に難しかった。とても一人で楽しむという感じではなく「ひも巻き独楽は無理なのだろうか。」とますます不安がつのった。とにかく家でも練習できるように独楽を1個ずつ渡した。

ところが翌朝 A子が回せるようになったのを得意気に見せにきた。巻き方も投げ方も家で父に教えてもらったそうである。待望の成功者第1号であり 教師に希望を持たせてくれた。続いてY男も4日目の休み時間に初めて回すことができたと興奮気味に見せにきた。2人ともこの時点では成功率50%程であったが 発表日までまだ1か月程あったので 皿乗せ^{注2}・すくいとりの技を課題として与えた。

M子 N子は「はやく自分も。」という気持ちでひもを巻くのだが 手先の器用さに欠けるため解けてしまう。その繰り返しで 一番したい投げる練習ができないため時々教師がひもを巻いてやった。

Y子はひもを巻けるようになっていたが 投げ方がおぼつかなかった。ところが6日目の朝「先生 ほら。」と裏投げ^{注3}で回して見せた。「だってお母さん上手やもん。」と家で習ったことを嬉しそうに報告してくれた。

現場実習1週間前 M子は時々回すことはできたが まだ自分でひもを最後まで巻けなかった。しかし自分で回せた時の喜びを知っているので 解けてもまだ根気強く巻いていた。何とか実習2日前に自分で巻けるようになったが 成功率は約30%程だった。後は実

習中 家で練習に期待するのみであった。

N子は巻くことも回すこともできずにいた。スナップを効かせて投げることは難しそうだったので 早くから2重巻きの回し方を教えた。ひもも巻いてやるのだが 持つ時ひもが解けてしまう。学校では練習はあまりしていなかったが 家で祖母に見てもらい 発表数日前に自分で巻け 発表3日前に初めて自分一人で回すことができた。成功率は低かったが それからは自分から休み時間練習していた。

独楽の重要なスキルとして 巻き方・持ち方・投げ方がある。どれも感覚的なもので言葉では伝授しにくいものである。それが教師としては はがゆかった。しかし独楽はどこでも簡単に練習できる遊びなので 生徒たちは休み時間になると体育館や教室の片隅で黙々と練習していた。アドバイスはしたが とにかく練習している姿勢をほめて励ますしかなかった。

④ 発表の様子

A子は パーフェクト合格を狙うため 台〔30×30×20(cm)〕の上で回す技を練習するうちに 投げ方がぎこちなくなり普通に回すこともできなくなっていた。当日も何回投げても回らず とうとう発表の場で泣き出してしまった。しかし2日後の再挑戦まで 担当ではないが信頼しているI先生にアドバイスしてもらい すくいとりも成功し9/9で合格することができた。

Y男は今回初めて導入された パーフェクト賞を励みに練習してきた。皿乗せの技も百発百中の成功率になっていた。本人も自信があって 発表が待ち遠しそうだった。見事1回で成功して 会場から大きな拍手を浴び パーフェクト合格を決めた。審査員からの質問で「皿乗せのこつは？」と聞かれ「こうやって こう。」と身振りで答えた。確かに言葉では説明できるものではなく とにかく練習を重ねて体で覚えたものであることを物語っていた。

Y子は練習では台の上で回すことは3回に1回程できたのだが やはり本番では緊張のせいか失敗の連続であった。それでも 何度も諦めずに挑戦していた。普通に回すことはできたので 7/9で合格した。

N子は2重巻きで発表した。3回目に成功。合格してホッとした表情を見せた。

M子は本番では緊張感が良い意味で作用し 練習ではあまり成功率の高くなかった すくいとりを成功させた。そしてパーフェクトで合格した。

⑤ まとめ

回すためにはとにかく巻かなければならない。しっかりと丁寧に。「次こそは。」とやる気持ちをおさえるように。「えいっ！」また失敗。何百回と巻いたであろう。それはまさに挑戦している姿であった。今回 独楽を挑戦学習の課題として取り上げたが その練習の様子は ある生徒にとっては「独り悶々と苦しむ」ものだったかもしれない。しかし

それを“楽”に変えたものは 伝承遊びだからこそ得られた家族の協力や励ましであった。

何よりも今回の挑戦学習で生徒が休み時間 根気よく練習していた姿や 「できたよ。」と嬉しそうに見せに来た時の顔がとても印象に残った。独楽は直接 生活に役立つものではないが その練習過程で根気や集中力を養い やや難しい課題であった分 大きな成就感と自信を生徒に味わわせることができた満足している。

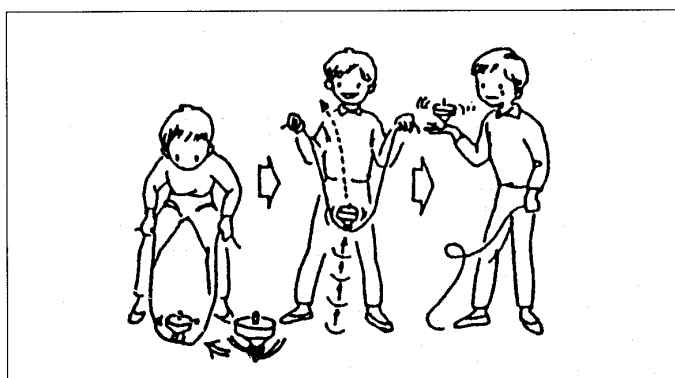
発表の結果 パーフェクト合格者が2名出たことは たいへん喜ばしいことだった。確かに生徒たちに更に上のレベルを目指すよい励みになっている。しかしその際 教師は課題を熟知した上で適切な合格ラインを生徒に提示することが大切であると 今回再挑戦者を1名出してしまったことで改めて認識した。

注1 すくいとり：地面で回っている独楽にひもをかけ ほうり投げ手の上で回す技。

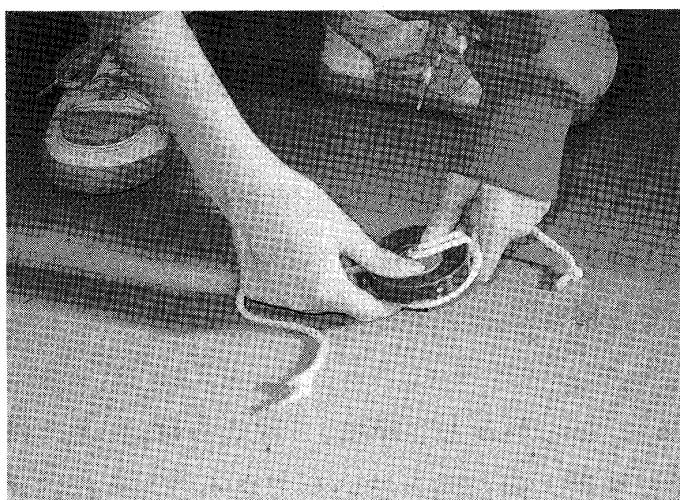
注2 皿乗せ：手に持った皿の上に 直接投げて回す技。

注3 裏投げ：フリスビーのように手の甲を向けて投げ 回す方法。

注4 二重巻き：二重にひもを巻いた独楽の心棒を地面につけ 左右にひもをひっぱり回す方法。



注1 すくいとり



注4 二重巻き



「うまく回るかな？」

(山崎晴生)

(4) 旅の計画

① 課題設定の理由

国鉄からJR西日本になったことで 最近ではテレビで“東京まで上越新幹線を使って3時間58分”“関西新空港へは「雷鳥+はるか」で”などコマーシャルが放送され 大都市圏への移動時間が短縮されてきている。またこのような情報は年々増えてきている。

生徒の中に野球が大好きな者がいる。「東京ドームで巨人戦を見たいな。」「甲子園で応援したいな。」などの話を聞くことがある。そこで机上ではあるが旅行を自分で計画する楽しみを味わって欲しいと思ったことと 自分一人で行けなくても保護者・兄弟と行く時に積極的に参加できるとしてこの課題を設定した。

昨年に引き続きこの課題を選択した2年生のF男を事例として書くことにする。

② F男の実態

F男は身体に軽いマヒがあるために 自分が思うほど手が動かない。字をはっきり書くことができず線がくっついたり 曲がったりする。しかし 書こうとする努力は十分認められる。日常会話の中で大きな位置を占めるのは野球のことである。給食時は友達と野球の情報交換 昼休みには体育館で野球 野球のシーズン中は毎日話題の中心は巨人である。そして大の松井ファンである。

市販の時刻表を使用して列車を捜すことは難しい。しかし F男は北陸本線のページを開いておくと そのページの中から指定した特急電車を捜すことができる。

昨年 JRの駅名の暗記に挑戦した。最初は七尾線の金沢→羽咋間15駅に挑戦したが 見聞きした駅名が少なく なかなか暗記できなかった。そこで 保護者と相談し 甲子園で行われる大好きな高校野球を取り上げることにした。金沢駅から甲子園までは特急列車を使用して15の駅があり 七尾線の課題と同じ数になる。しかし 積極的な様子がみえたので 甲子園までを覚えることにした。夏季休業中に駅名を覚えるために父と2人で応援列車に乗り 覚える駅名を走る列車の中からカメラで撮影した。大きな紙に写真を順番に張り 写真を見ながら覚えることにした。興味のあることに関連づけると覚えることができた。ちなみに課題の北陸本線と阪神電鉄の駅名は金沢・小松・加賀温泉・芦原温泉・福井・鯖江・武生・敦賀・京都・新大阪・大阪・梅田・野田・尼崎・甲子園である。

③ 課題選択の時の様子

昨年挑戦していたので 「旅の計画」を提示した時には1番先にプラカードの前に集合した。集合したときの顔は今年もやれる 1回で合格するという自信ありげな表情だった。

④ 練習の様子

今回の課題は教師から受けた注文に基づいて出発時刻の列車をMT時刻表から捜し 計画用紙に記入するものである。MT時刻表とは市販の時刻表から 北陸本線の特急電車と新幹線を使用して東京・京都・名古屋・博多間と東京・長岡・新潟間往復の時刻が書かれ

たMT専用時刻表である。東京方面へは長岡経由のみとした。

JR乗車券に書かれたような小さな字は判読が難しくなるので 計画用紙は十分余裕をみてB4紙を使用することにした。枠からはみ出さずに書くことは難しいが それも課題とした。

旅をする目的に野球を関係付けたほうが良いことはF男の実態からわかる。そこでF男と話し合い「附属養護学校MTトラベル」として「プロ野球ナイター観戦ツアー」を企画することにした。

MT時刻表から先ず自分が野球観戦したい球場を選択し その都市がある時刻表のページを開くところから始まる。MT時刻表には行き先とプロ野球チーム名が上の方に大きな文字で書いてあるので 比較的容易に開くことができた。何よりも野球に関することなので意欲的である。

F男の大好きな球団は巨人なので目的地は巨人戦の東京ドームにした。ナイターは午後6時30分頃から始まるので 球場到着は午後5時頃とした。早めにつくと練習中の選手が見られるので面白い。そこで東京駅に到着する時刻を4時頃として 一番乗継ぎが良い往路の時刻を調べると以下の時刻になった。

金沢駅(11:03 雷鳥13号) →長岡駅(13:59)

長岡駅(14:08 あさひ316号) →東京駅(15:52)

上記の往路列車を売り込むことにして 翌日の復路は表N-2の中から都合の良い時間を教師から注文してもらい 計画用紙を作成することにした。往路を練習しておけば復路も同じ駅を通ることになるから駅名の練習は同じである。しかし 金沢 長岡 東京の文字は画数が多く 駅名を計画用紙に駅名を書くことに練習時間の多くを費やした。

MT時刻表から調べた列車を計画用紙に書くに当たっては 時刻の間違いがあってはならない。MT時刻表を切抜き 復路に使用する列車別のカードを作成した。時刻と乗り継ぎが間違いないように 確認しながら全ての列車について書く練習をした。ここでも問題になったのは雷鳥 白鳥 北越など画数の多い列車名であった。練習は単調になりがちであったが 巨人のことや野球の話をしながら行った。1年生の時と同じように自分が行きたいという願望が強く 家庭でも保護者と何回も練習した。その練習は大きな紙を使い赤く書いた文字の上から黒でなぞるかたちをとった。

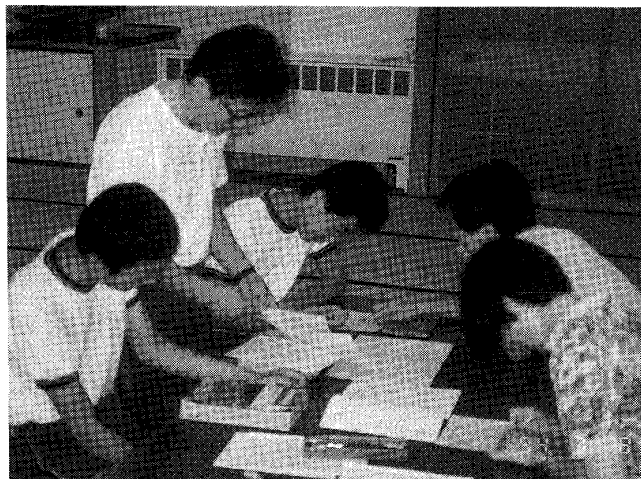
家庭の協力と毎日の昼休み・放課後の練習で所定の位置に何とか書くことが出来るようになった。

⑤ 発表の様子

発表は自分が選んだ教師から注文を受ける形をとった。F男の大好きな巨人戦のある東京を売り込み 注文用紙には「東京ドームナイター観戦ツアー」として記入してもらったこととした。注文用紙には金沢駅出発時刻と出発日を1泊2日の旅行として指定してもらっ

た。

往路は練習を重ねた時刻と列車だったのでMT時刻表から容易に見つけ記入することができた。復路はMT時刻表のページを開くことはできたが東京駅発の列車を見つける際に少し担当教師の補助を要した。生徒全員の前なので緊張していたようである。金額は東京往復（長岡経由）は23,000円と決めてあったのですぐに書けた。



注文を受ける

⑥ まとめ

高等部を卒業すると実社会に出ることになる。卒業生の中で趣味・余暇の使い方の一つとして旅行をあげている者もみられる。机上旅行ではあるが 1冊の時刻表を使った旅は想像と夢と一緒に体験することができる。学校から示された修学旅行などの計画がどのような経路で どんな乗り物に乗るのかを 自分でも時刻表で確かめるという楽しみもでてくる。

F男は自分でMT時刻表が読めたことについて満足している。この課題を実践と結びつけることは費用と時間を要することなので難しい。しかし 日々の情報の中からF男が選択して 家族の旅行や友人との旅行についてのアドバイスができるようになった。今後の課題として 市販の時刻表から旅の計画を作成できるようにさせたい。

表N-2

MT時刻表

東京【巨人 ヤクルト 横浜 西武 日本ハム ロッテ】

東京駅 → (長岡経由) → 金沢駅									
東京駅	8:17	9:07	10:08	11:08	12:08	13:08	14:08	15:24	16:08
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
列車	あさひ301	あさひ305	あさひ309	あさひ311	あさひ313	あさひ315	あさひ317	あさひ319	あさひ321
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
長岡駅	10:00	10:55	11:40	12:56	13:41	14:48	15:56	16:52	17:48
長岡駅	10:10	11:06	11:48	13:06	13:51	14:56	16:06	17:00	17:58
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
列車	雷鳥30	雷鳥32	かがやき4	白鳥	北越2	かがやき6	雷鳥44	かがやき8	北越4
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
金沢駅	12:55	13:46	14:18	15:46	16:38	17:26	18:50	19:31	20:42

(島 清 徳)

(5) けん玉

① けん玉を選んだ理由

「今の子どもは遊びを知らない」あるいは「今の子どもは遊びが貧しい」とよく言われる。実際 ファミコンやテレビゲームなどの遊びが今の子どもの遊びの主流のようである。しかしそれでよいのか という疑問や問題提起は新聞等でよく目にするところである。今回挑戦学習の課題としてけん玉を選んだのは 昔からの伝承遊びをしっかりと伝えることが今の時代だからこそ大切ではないかと考えたからである。

けん玉は糸でつるした玉を皿やけん（剣）に入れるという単純なものではあるが 昔から集中力を高める遊びとしてその有為性が認められているものでもある。実際 全校あげてけん玉に取り組んでいる学校も多くあると聞いている。またけん玉は場所や時間を選ばず一人でも仲間同士でもできる遊びである。それに以前から「日本けん玉協会」が設立されており 級位・段位認定の基準（資料参照）がはっきり示されていることでも分かるように 年齢や性別を問わず 全国で同じやり方 同じルールでできるものである。

② 課題提示及び選択の時の様子

課題提示では当然のことながら実際に子どもの前でけん玉の技をいくつかしてみせた。どの技でも子どもたちは一様に感嘆し 拍手してくれたが 中でも「ろうそく」「とめけん」「ふりけん」に興味をもったようである。

課題を選ぶ時には5名がさっと集まってきた。真っ先にきたH子は「自分がしたことのないものに挑戦しよう」という思いできたということで 教師を喜ばせたものである。そこでこの項ではH子の練習及び発表の様子を主に記したいと思う。

③ H子の実態

H子は昨年度 中学部3年の二学期始めに市内の特殊学級より本校に転入学し 今年度本校高等部に入学した。知的能力は比較的高い方で 本校高等部の能力別学習ではHighグループに属している。性格はおとなしいが自分の思ったことは強引に通そうとするところもみられる。また恥ずかしがりやで初めてのことには消極的である。学習への参加態度では気分がむらがあり 興味がある時は積極的に参加するが やる気のないときは顔を手やタオル等で隠して座り込んでしまう。しかし普通の高校生と同じことをしたいという気持ちを強くもっている。野球とJリーグに興味を持ち 話題のほとんどを占めている。

④ 練習の様子

初めての練習の時は最も基本的なけん玉の持ち方と大皿に入れる技を指導した。持ち方は比較的早く覚えたが 玉を大皿に入れるのは全くできなかった。その原因の第一は初めてなので当然だが玉を引き上げる時の力の加減が分からず また真っすぐ上に挙げることも十分でないためであり 第二は受けるときに大皿が傾いていることと 玉を大皿の方が迎えにいっていることであった。（玉を迎えにいくと結果的には玉を弾くことになる）

夏休み中は学校のけん玉と持ち方や基本の技を図入りで説明したプリントを家にもって帰り 練習していた。自分から選んだ課題だけに頑張っているとの報告があった。また特に二学期になってからは休み時間のほとんどを費やして練習をし 成功する度に嬉しそうな表情で報告してきた。このように集中して取り組む姿は今までほとんど見られなかっただけに その一生懸命な気持ちが我々教師にも伝わってきたものである。

このように練習を重ねてきた結果「大皿」「中皿」「小皿」の3つの他に「ろうそく」もたまにはできるようになった。

⑤ 発表の様子

発表の直前にはかなりのプレッシャーを感じていたようで 待っている時も落ち着きがなかった。その前日に様子を見たところ「大皿」は級位認定基準の確率（30%以上）で入るようになっていたが「中皿」は10%位の確率であった。むしろ「小皿」はかなりうまくなっていて40%位の確率になっていた。そんな状態だったのでH子本人も合格はおぼつかないと思っていたようである。しかし発表の時になり 一回目の試技が偶然に入ったことで安心感をもったのか いつもと同じような感じで試技することができた。結果は「大皿」が試技10回中2回成功だったが本人の「まだする」の意思表示を入れて結局13回の試技で4回成功 「中皿」は試技13回で成功は0回だったが「小皿」が試技7回で3回成功した。そして審査員9人中8人の合格プラカードが挙がり見事合格した。これはやや甘い判定とも思えるがH子の普段の実態から考えると一生懸命課題に取り組んでいることが練習の様子からもよく分かったからであり また確実に上手になってきたからと思われる。合格の瞬間 H子はうれしさと恥ずかしさの入り交じったような表情を見せ 安堵感と喜びを全身に表していた。



入った！

⑥ まとめ

今まで初めてのことには消極的で自分からは取り組もうとしなかったH子だが 今回の挑戦学習では自分から進んでけん玉に挑戦してきた。そしてけん玉をしている時のH子は表情が明るくにこにこしており 特に入った時には喜びを爆発させていた。練習の成果としては発表の段階では当初教師の希望した所まではいかなかった。しかしその後自分のけん玉を買って喜々として練習を続け H子の実力は日を追って確実に上達してきた。自分でもそれが分かるのか「もう一回発表したい」と言ってくるのを見て 指導して良かったと思っている。初めて自分から取り組んだこのけん玉がH子の趣味の一つになり 今後学校を卒業してからも楽しんでくれれば と願っている。 (石井 雄史)

(6) 洗濯とアイロンがけ

① 課題設定の理由

障害をもっている子どもたちの場合は「自立」ということが大きな目標の一つである。自立するためには社会生活を営むうえで必要ないろいろな技能を身につけていくことが大切である。そのなかで もっとも基礎的なものが「身の自立」であるといえる。小さいときから身の自立に向けて保護者と子ども、そして教師と三者一体になって努力してきたが、いまだに定着できない子どもたちが多数である。このような現状とこれから実社会に出て自分一人の力で活動していくことを考えた場合、最低でも「自分のことは自分でできる力」を習得する必要がある。そこで日常生活のなかから、夏休み中に保護者と子どもとで協力できる「洗濯とアイロンがけ」という課題を選んで設定した。

② 課題提示および選択の時の様子

課題提示のときには具体物を使うなど、できるだけ生徒たちに選んでもらえるようなアピールの仕方をした。しかし、生徒たちが本当にこの課題を選択してくれるかどうかとても心配だった。でも課題を選ぶ時には、2人の生徒がさっときてくれたので、まずはほっとした。その後から迷っていた他の2人も、こちらの呼びかけで集まった。この課題を選択した全員に、選んだ理由を尋ねると4人とも「せんとくが上手になりたいから。」という答えであった。なかでもT子は「今まで一人でせんとくをしたことないし、アイロンがけも一度もしたことがないから一人でできるようにしたい。だからがんばってやりたい。」と力強く言ってくれた。T子の意気込みを感じ、教える側も励まされる思いであった。そこで、ここではT子の取り組みの様子を述べていきたいと思う。

③ T子の実態

T子は高等部の2年生である。知的な能力は比較的高いほうで、能力別学習では一番高いグループに入っている。性格は明るく素直で活発であるが、やや自閉的傾向が見られ、物事へのこだわりがある。また自分と他者を比べることが多く、自分だけ他の人と違うことを言われたりすると不安になり、落ち着きがなくなることがある。そのため、納得して行動するまではかなりの時間がかかることもある。T子の家は、飲食店を営んでいるため両親とも忙しく、母親といっしょに家事などをする時間がなかった。そのため、自分の身の回りのことを一人でするという経験もほとんどなかった子である。

④ 練習の方法と様子

課題の内容は、洗濯についてはまず自分の衣類を手洗いで洗う——すすぐ——しぼる——ほす——あとしまつ——洗濯ものをとりこむ——たたむという作業を全部一人で行えるようにすること。(余裕があれば洗濯機を使っての洗濯) アイロンがけについては、アイロンを自分で用意し、温度調節もしてハンカチやワイシャツのえりなどのアイロンがけができるようになること、の2点であった。

初めての練習のときは 洗濯の手順を教えて靴下を洗うことを指導したが 手順がなかなか理解できずに常に声かけをしていた。洗い方も両手でもみながら洗うという動作がぎこちなく 絞り方も手首をひねって絞ることができず大変であった。またアイロンがけについては アイロンが怖くてさわることもできなかった。そこで毎日少しずつT子の手を取りながら練習していった結果 夏休みに入る前には一応の手順が理解でき なんとか指示がなくても一人でアイロンがけができるようになった。

夏休み中は 課題説明の入った記録用紙を家に持ち帰って練習後に記入させるようにした。しかし夏休みの前半はほとんど練習しなかったせいかな 8月20日の登校日の練習では指示なしでは洗濯ができなくなっていた。またアイロンがけはまだ一度もしていないということであった。母親の仕事が忙しくてほとんど見てやることができなかったということなので 再度協力をお願いしてT子を励ましたりしながら取り組んでもらった結果 洗い方はとても上手になった。怖がっていたアイロンがけも 慣れるにしたがい何とかできるようになった。

⑤ 発表の様子

二学期に入ってから毎日練習していて 日に日に自信がついてきたせいかな 「いつ発表ですか？」と聞きにきたりして 発表の日を心待ちにしている様子であった。発表の日みんなの見える前で靴下を洗い すすいでしぼり アイロンがけは ハンカチにアイロンをかけてきれいにたたみ それぞれ仕上がったものを審査員に見せ審査をうけることにした。T子は特にあがった様子もなく手早く洗っていた。アイロンがけは アイロンに入れた水が多すぎて途中で熱湯が噴き出してしまい少しあわてていたが 水の量を調節して使えるようになっていた。ハンカチもしわにならずきれいに仕上がっていた。審査の結果 9人中7人の合格プラカードが挙がり見事合格できた。T子はほっとしたのか 胸に手を当てて小さな声で「よかった。」とつぶやいていた。絞り方がゆるいという指摘を受けたものの「これからも毎日頑張ります。」という返事に意気込みが感じられた。

⑥ まとめ

挑戦学習の発表後も洗濯は毎日続けていて 今では家族の分まで洗っているそうである。夏休み中の課題の練習を通して T子は苦手だと思っていた家事にも積極的に取り組むようになった。T子が「せんとくができるようになったから今度は料理ができるようになりたい。」と言うのを聞いた時は 今まで一緒に取り組んできて良かったととてもうれしく思った。その後の挑戦学習では家事にも意欲的に挑戦するようになった。この学習を通して学んだことがこれからもT子の生活に生かされていくことを強く望んでいる。

(熊野 嘉子)

3. まとめ

最後に挑戦学習について当初取り組まれた中で研究課題として残されていた問題がどの程度克服されたか また研究テーマとの関連でどのように深めることができ 残された問題点は何かについてふれてまとめたい。

はじめに当初残されていた研究課題の克服についてみていきたい。その第一は「5・6限というMTの時間を超過することがよくあり 時間延長の措置を取らざるを得ない」ことについてである。確かに発表の時間を考えた場合 一人一人が発表に要する時間と生徒数の関係から時間割に表記してある時間のみではまかないきれないことは明白である。今年度の取り組みとしては挑戦学習の年間計画を立てるとともに 一回当たり必要な時間数を課題提示から評価まで大まかに設定したことである。このことによりあらかじめ時間が確保されているので余裕をもって指導にあたることができたと言える。

第二に「家庭と連絡をとって練習方法を徹底させること」についてである。特に近年は長期の休み（夏季休業 冬季休業）を前に課題を提示し 家庭学習としての位置付けをもった取り組みを行ってきており 家庭の協力に負うところが大きくなってきている。練習方法については本人に伝えるとともに手引書 ワークブック等に練習方法を詳しく記入して渡すことにしている。また細部にわたっては電話等で直接連絡をとったり連絡帳の活用をしたりしている。

第三に学習課題の問題として「日常的なものもあっていいのではないか」という点に関してである。この「日常的なもの」を日常生活に大きく関わっている内容とみた場合 初年度の学習課題一覧表（『研究紀要』1981）によるとその割合は極端に少ない。今年度についてみると日常的な内容としては「皮むき」「水うつし」「洗濯とアイロンがけ」等があり 普段大事とされながらも見過ごされていることがこの機会に取り上げられ取り組まれるようになっていく。

第四に「合否判定に際し 見ている生徒の参加の方法」に関してである。合否判定についてはMT委員が審査員に加わるが 残りの生徒はその全てを審査員に委ねることになり 基本的には当初の形と変わったところはない。ただ“参加”という点では発表が終わった後 時間的にゆとりがある場合に他の生徒の課題にその場で挑戦してみるというやり方で意欲を引き出すことを試みている。

第五は指導案の形式についてである。指導案の記入については学習の形態が通常のものとは大きく異なるため多くの困難を持ち合わせているが 必要な整理を行い 示すことにした。（実際の指導案は『発表要項』参照のこと）

当初だされていた今後の研究課題との関係は以上の通りであるが 「一番各教師をとまどわせた」カリキュラムの問題についてもふれているので若干述べておきたい。この挑戦学習に取り組み始めた段階では今まで研究課題としてとりあげられなかった「特別活動の

時間に光をあてた学習」としている。それは部を単位とした集団学習の発展ということからそのような位置付けになったと言えるが 教育課程づくりにむけてさらに検討を加えることにした。そして『教育課程』(1988)では特別活動にとどまらない内容を持ち合わせていることから「領域・教科を合わせた指導」として位置付け 今日においても確認されているところである。

次に「豊かな心と生活をめざして」というテーマとの関連でこの挑戦学習の取り組みはどうであったのか振り返ってみたい。この点についてはすでに「テーマとの関連で」というところで示した要約(①～③)にてらして見ていくことが妥当と言えるであろう。

これまで事例として 学習課題を中心としたものと個の取り組みを中心としたものに分けて6つ取り上げてみた。挑戦学習の取り組みの大きさから言えばこれだけにとどまるものではないが どれも学習課題をやりとげ正しく評価されることによる生徒の喜び 自信 誇りといったものが共通してふれられていた。これらの心の高まりは今後の生き方にもおおきくかかわっていくものとなるであろう。特筆すべきはこの学習が生活の中や他の学習の中に生かされている点である。洗濯とアイロンがけに挑戦した生徒はそれまでほとんどしなかった家事を少しずつするようになり けん玉に挑戦した生徒は合格後 趣味の一つとして続けている。また自分が挑戦しなかった課題に対して「自分もやってみたい!」と取り組む者がでてきていることも見逃せない。さらに挑戦学習で蓄積した力を運動会や表現会で発揮している例もあり 生活のいろいろな場面で挑戦学習の成果が生かされていることを実感している。

目当てをもった取り組みという点では事例の性格上取り上げなかったが 日常的な会話の中で「今年は百人一首を○首覚えたい。」とか「卒業までに全部覚えるのは無理かなあ。」といったことが生き生きと話されていることをあげておきたい。

このように挑戦学習の取り組みは研究テーマとの関連でも積極的な面をもっていると言えるが 今後実践の中でさらに深めなければならない点があることも否めない。

その第一は学習課題の内容である。とりわけ障害の重い生徒に対しては配慮の点も含めて常に論議になってきたところである。障害の重い生徒の場合 親の協力のウェイトが大きい ということから今後は生徒にとって必要と考えられる課題について親の要望もうけいれながら進めることが大切であろう。またこれまで十数年の実践の蓄積もあることから長期にわたって取り組む課題と短期で取り組める課題との整理を行い 今後を生かしたいと考えている。さらに新たな学習課題として「連絡日記の書き方」「制服のたたみ方」など学校生活の中から内容を見つけ 提示することも検討している。またこれまで発表の仕方の困難さから取り上げられなかった「買い物」などについても工夫をこらし 課題として提示したいと考えている。

深めていきたいことの第二として発表のことについてふれておきたい。生徒一人一人の

取り組みを考えるとどうしても時間をかけすぎてしまう傾向になることから 例えば一度に複数の生徒の発表をすとか 覚えた内容の一部を発表することで時間短縮を図るなど 効率のよい発表のあり方についても探っているところである。

以上 挑戦学習の取り組みについて述べてきたが 「豊かな心と生活をめざして」というテーマにてらすならば一断面の取り組みに過ぎず 不十分な点も多くもっていると言えよう。これらの点は今後の実践の中で改めていきたいと考えている。

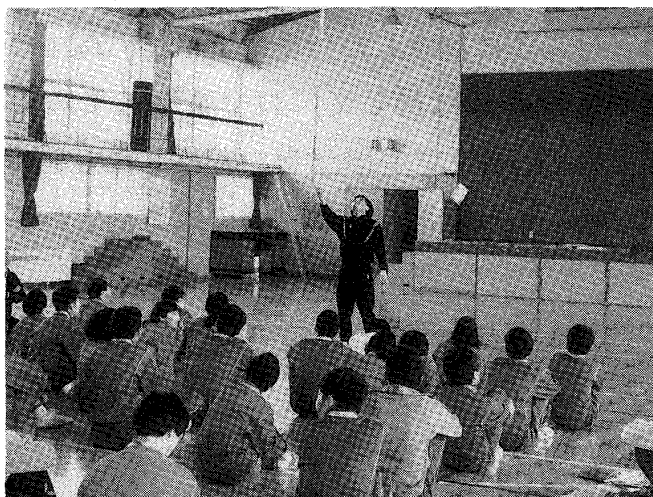
(安田茂章)

《引用文献 参考文献》

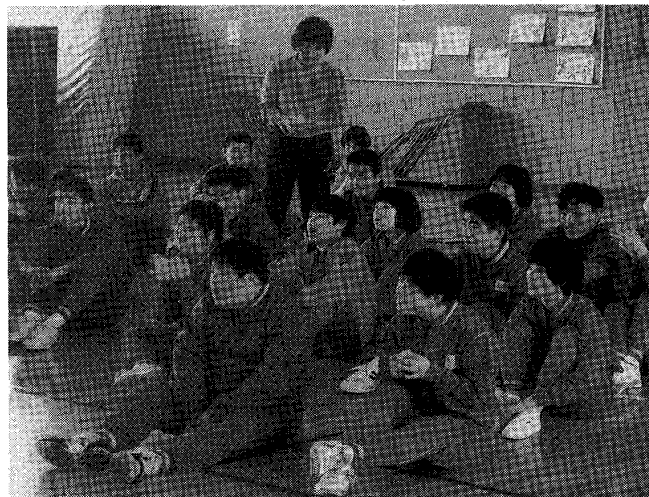
竹井史郎他 伝承あそび大百科 サンリオ出版

本校研究紀要 (1981)

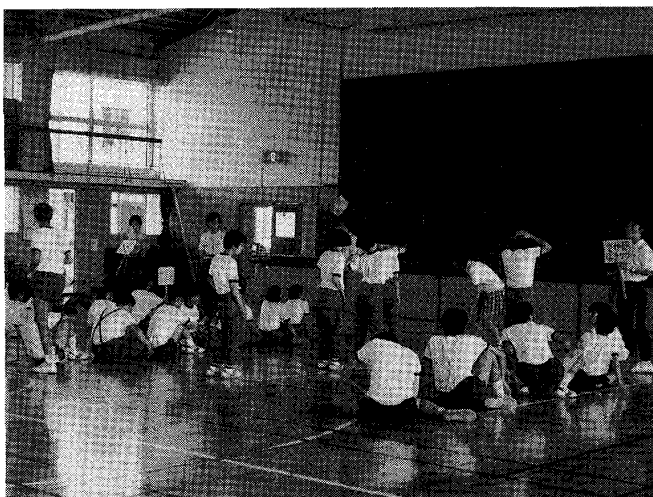
本校研究紀要 (昭和57年度)



課題提示 (実演)



提示を見る



課題選択



練習方法を聞く

挑 戦 学 習 一 覧 表

◎：パーフェクト合格 ○：合格 △：再挑戦合格

提示日 生徒名	5月2日	6月13日	7月15日	7月15日	10月7日	12月19日
01男	プロ野球博士 ○	皮むき ◎	詩の暗誦 ◎	折り紙 ○	紙きり ○	百人一首(5) ◎
02男	プロ野球博士 ○	漢字の読み ◎	英単語 ○	倒立 ○	漢字の読み ○	" (20) ◎
03男	バドミントン ○	水うつし ◎	漢字の筆順 △	けん玉 △	ネジまわし ○	" (10) ◎
04男	縄跳び ○	缶きり ○	/	キャッチボール △	ネジまわし ○	" (3) ○
05男	プロ野球博士 △	缶きり ○	/	折り紙 △	漢字の読み ○	" (5) ○
06女	プロ野球博士 ◎	独楽 ○	/	折り紙 ◎	皮むき ◎	" (5) ◎
07女	ひも結び △	独楽 ○	詩の暗誦 ○	洗濯とアイロン ○	紙きり ○	" (6) ○
08女	俳句の暗誦 ◎	紙風船つき ◎	/	洗濯とアイロン ○	皮むき ○	" (3) ○
09女	プロ野球博士 ○	皮むき ○	漢字の筆順 ○	けん玉 ○	かけ算 ◎	" (20) ◎
10女	(欠席)	(欠席)	(欠席)	(欠席)	(欠席)	(欠席)
11男	紙飛行機 △	旅の計画 ○	詩の暗誦 △	倒立 △	かけ算 ○	百人一首(35) ○
12男	プロ野球博士 ○	旅の計画 ○	漢字の筆順 △	キャッチボール ○	干支 △	" (14) ◎
13男	ひも結び ○	缶きり ○	/	キャッチボール ○	ネジまわし ○	" (5) ○
14男	縄跳び ○	アルファベット ○	漢字の筆順 △	けん玉 △	かけ算 △	" (15) ○
15女	バランス棒立て △	漢字の読み ○	漢字の筆順 ○	折り紙 ○	漢字の読み ◎	" (15) ◎
16女	(欠席)	皮むき ○	/	(欠席)	皮むき ○	(欠席)
17女	紙飛行機 ○	水うつし ○	/	けん玉 ○	コンロと目玉焼 △	百人一首(6) ○
18女	バドミントン ○	皮むき ○	漢字の筆順 △	洗濯とアイロン ○	コンロと目玉焼 ○	" (60) ◎
19女	バドミントン ○	水うつし ○	英単語 ○	キャッチボール ○	皮むき △	" (20) ○
20女	旅の計画 ○	漢字の読み ◎	英単語 ○	倒立 ◎	干支 ◎	" (60) ◎
21男	バランス棒立て ○	紙風船つき ○	英単語 ○	けん玉 ◎	干支 △	" (20) △
22男	紙飛行機 ○	水うつし ◎	詩の暗誦 ○	折り紙 ○	紙きり ○	" (20) ○
23男	バランス棒立て ◎	漢字の読み ○	詩の暗誦 ◎	倒立 ○	紙きり ◎	" (100) ◎
24男	バドミントン ○	独楽 ◎	英単語 ○	キャッチボール ○	あき缶つみ ○	" (38) ○
25男	旅の計画 ◎	アルファベット ○	英単語 ○	倒立 ○	かけ算 ○	" (80) ◎
26男	旅の計画 ◎	アルファベット ○	漢字の筆順 ○	キャッチボール ○	干支 ◎	" (22) ◎
27男	旅の計画 ○	缶きり ◎	/	折り紙 ○	あき缶つみ ○	" (3) ◎
28女	ひも結び ○	独楽 ◎	漢字の筆順 △	キャッチボール ○	紙きり ◎	" (20) ○
29女	バドミントン ○	独楽 △	英単語 ○	倒立 ○	あき缶つみ ○	" (73) ○
30女	バドミントン ○	紙風船つき ○	/	洗濯とアイロン ○	コンロと目玉焼 ○	" (11) ○